

フィリピン、ヴィサヤス地域、ギマラス島沖における重油流出事故について 澤村 圭（フィリピン大学ピサヤ分校：東京海洋大学交換留学生）

2006年8月11日、フィリピン中部のギマラス島沖で、フィリピン大手石油会社であるペトロン社のSolar 1号の沈没に伴う重油流出事故が発生しました。流出した重油はギマラス島、そしてパナイ島など隣接する島の海岸に漂着し、多大な被害をもたらしました。影響を受けた海岸線は約235kmで、約40,000人の住民が被害を受けました。事故が発生したこの時期は、干潮時でも最低20cm程の水深があったために珊瑚や魚類に対する被害は少なかったものの、マングローブや海産爬虫類（ウミガメ・ウミヘビ）、貝類に対する被害は大きかったようです。

漂着した重油の清掃についてですが、東南アジア漁業開発センター養殖部局（SEAFDEC/AQD）、フィリピン大学やセリマン大学等の研究機関、地域住民や学生を中心としたボランティア等が初期活動にあたりました。その後、ペトロン社とフィリピン沿岸警備隊が被害を受けた地域住民を中心に雇用し、重油の清掃活動に加わりました。政府は人体への影響を考慮して当面の漁業活動を禁止したので、地域住民の雇用は漁業収入に代わる収入源の確保という役割も担っていたようです。しかし、雇用人数に制限があったために、実働することのできる日数は限られていました。また、ペトロン社と沿岸警備隊に雇われたのは、18～65歳までの法的に認められている漁業者のみで、18歳以下、65歳以上の漁業者は収入確保のため漁業活動を続けたとのことでした。また、ガスマスク、手袋、長靴等の備品が不足したせいか、清掃活動に参加した人が体調を崩すというケースが後を絶たず、9月の7日に、政府がガスマスク、手袋、長靴の着用を義務付けました。その後は、雇われた人達を中心に清掃活動が行われました。

重油の清掃方法については、古新聞、稲の茎、髪の毛、洋服等の布、そして、化学分散剤を使用して、海岸に打ち寄せられた重油を吸い取るという方法が取られました。また、汚染された砂や石等も回収されました。ペトロン社は、9月20日までに清掃活動の行われた海岸線は約165km、回収された砂、石は約1900tと報告しました。マングローブに付着した重油の除去に関しては、古新聞や布類を使用して、葉や茎を1つずつ拭き取るという方法で清掃する予定でしたが、効率が悪いために、一部の地域では化学分散剤の使用や、茎の表面を削る等の荒々しい方法もとられたようです。その後、この化学分散剤使用が環境に悪影響を与えると報告され、重油による汚染の他に化学分散剤も環境に大きな被害を与えた事になります。

ペトロン社はSolar1号が積載していた10個のタンク（2,100kl）のうち破損したのは1つ（210kl）のみであると報告しましたが、タンカー引き揚げ作業の際に回収された重油は約9klのみでした。つまり、約1,880klの重油は海の中へ消えたこととなります。また、大半の地域住民は沿岸域に住んでいたため、小学校等に設置された避難センターや重油による被害の無い安全な場所への避難を余儀なくされました。また、漁獲した魚は汚染の可能性があるために売れるはずが無く、清掃活動による収入も十分ではなかったため、漁業者は生活費を捻出するのに大変だったといえます。ギマラス島における重油流出事故がもたらした影響は、環境被害以外にも、地域住民への社会的・経済的な影響も大きかったと考えられます。（図および写真はwww.panda.orgより提供）

